

令和7年12月16日

秩父市議会議長 堀 口 義 正 様

文教福祉委員長 宮 前 昌 美

文 教 福 祉 委 員 会 行 政 視 察 報 告 書

1 期 日 令和7年10月21日（火）～23日（木）

2 視察先 熊本県熊本市、八代市

3 参加者	委員長	宮 前 昌 美	副委員長	本 橋 貢
	委員	坂 本 勝 幸	委員	笠 原 宏 平
	委員	赤 岩 秀 文		

4 視察目的

熊本県熊本市（社会福祉連携推進法人ジョイント&リップル）

「社会福祉連携推進法人」

○ 市の概要

熊本市は九州の中央、熊本県の北西部に位置し、人口74万人。九州では福岡市、北九州市に次ぐ3番目に大きな都市で、2012年には政令指定都市に移行した。

熊本城を臨む市中心部には、百貨店や西日本最大級とも言われるアーケードを備える繁華街があり、九州でも有数の都会性を持った都市でありながら、古くから「水の都」「森の都」として、自然に恵まれた農業が大変盛んな地域として、2024年の市町村別農業産出額は全国9位である。また、人口あたりの病院数は政令指定都市中1位（厚生労働省「平成29年医療施設（静態・動態）調査」）であり、24時間365日対応できる救急医療体制も整備されるなど、全国的に見て医療体制も充実している。

○ 法人並びに事業の概要

「社会福祉連携推進法人ジョイント&リップル」は、社会福祉法人リデルライトホームが中心となり、現在6法人で構成されている。

社会福祉連携推進法人とは、社会福祉法人などが社員となり、福祉サービス事業者間の連携・協働を図るための取組等を行う新しい法人制度で、2020年6月に公布された「地域共生

社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律」に基づき、2022年4月から施行された。ジョイント&リップルでは、さまざまな福祉に関わる事業体が連携し、事業を継続していくための人材育成と確保、魅力発信、福祉事業者の質向上に向けた取り組みを行い、重層化する福祉課題に対し、合併や譲渡ではなく、それぞれの特性を生かした“連携”をしている。



熊本県八代市 「八代市民俗伝統芸能伝承館 お祭りでんでん館」

○ 市の概要

八代市は熊本県中央部の南側に位置し、県第2位の人口約11万人の都市であり、明治時代には八代港が近代的な港湾として整備され、1890年（明治23年）に九州第1号のセメント工場ができたのを皮切りに、以後、製紙工場（九州製紙、現日本製紙）、日曹人絹パルプ（現興人）、昭和酒造（現メルシャン）と相次いで進出し、工業都市（八代臨海工業地域）へと発展した。毎年11月22日・23日に行われる「八代神社の妙見祭」は、江戸時代から続く秋の大祭で、長崎県の諏訪神社おくんち（長崎くんち）・福岡県の宮崎宮放生会と並び、九州三大祭のひとつに数えられる。御輿、獅子舞、神馬、花馬、傘鉾、亀蛇（がめ）などが居並ぶ行列は1.5kmに及ぶ。国の重要無形民俗文化財に指定されており、2016年には、ユネスコの無形文化遺産に登録され、注目を集めている。

○ 事業の概要



「八代市民俗伝統芸能伝承館 お祭りでんでん館」は、八代市に残るさまざまな民俗文化財の保存継承と魅力を発信するとともに、祭りや伝統芸能を支える後継者育成の場として、2021年に設立された。お祭りでんでん館には、八代市を代表する祭り「八代妙見祭」を体感できる3面シアターや、神楽・棒踊りなど市内各地に伝承する民俗文化財の魅力を紹介する常設展示のある展示棟のほか、妙見

祭に登場する獅子や笠鉾などの文化財を保管するための収蔵棟、伝統芸能の練習の場として活用できる伝承ルーム、会議室を備えた会議棟などがある。

インバウンドを含む観光の拠点としても活用され、展示を通して伝統文化財の魅力を内外

に伝えている。また、笠鉾などの文化財そのものの保存だけではなく、後継者不足により消えゆく民俗芸能の記録も保存し、未来へと継承していく活動を行っている。

熊本県熊本市（熊本学園大学）

「2016 年熊本地震におけるインクルーシブな避難所運営の実践」

○ 大学の概要

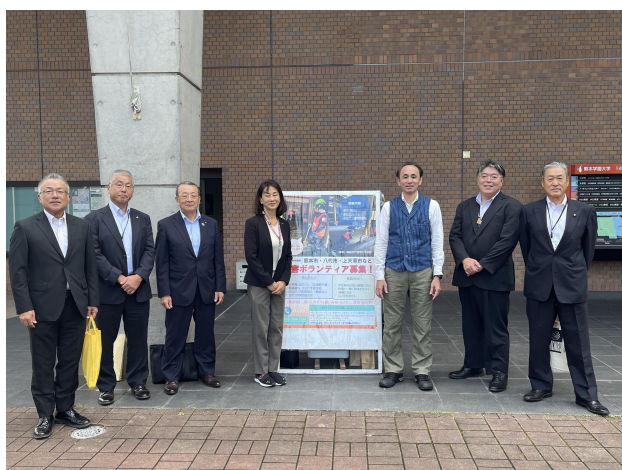
熊本学園大学は、1942 年創立、1954 年大学設置。経済学部・商学部・外国語学部・社会福祉学部を合わせ、約 5,000 人の学生が在籍しており、師弟同行・自由闊達・全学一家の建学の精神を礎とし、地域に根差し、世界に飛躍する人材の育成を行っている。また、地域社会の期待に応える「地域に開かれた大学」として、図書館の一般利用も可能とするなど、地域との連携も重視している。



○ 事業の概要

2016 年 4 月に発生した熊本地震の際に、熊本学園大学では、社会福祉学部の教授・学生が中心となり、指定避難所ではない避難所として、「インクルーシブな避難所運営」を実践した。自主避難してきた住民に対し、積極的に避難所を開設し、障がいの有無に関わらずすべての人を受け入れ、その数は 750 人にもなった。避難所は、「どなたでもどうぞ」の原則のもと、障がいや年齢、生活状況に関わらず安心して過ごせる環境づくりに努め、障がいのある方への合理的な配慮を重視した運営を行い、インクルーシブな避難所として 45 日間運営された。

従来、激甚災害下で行き場のない在宅障害者や援助を必要とする在宅高齢者に対して一般



の避難所での避難スペースの提供は前例がなく、これは独自の取り組みであり、地域の「災害弱者」と言われる人々を受け入れ実践したことは、メディアや災害関係者からも高く評価された。

また、避難所閉鎖後においても、地域包括ケアシステム推進体制づくり等の高齢者施策の中に災害対策の視点を取り入れるなど、行政と協力し、積極的な取り組みを続けている。

【 個人の熱意が、組織を動かす 宮 前 昌 美 】

文教福祉委員長としての行政視察を終え、視察先並びに議会事務局に心から感謝したい。

1. 熊本県熊本市（社会福祉連携推進法人 ジョイント&リップル）

合併や譲渡ではなく、それぞれの特性を生かした“連携”がなされている。平成28年の熊本地震を教訓として、大規模災害訓練や、人材確保、福祉避難所の開設など、福祉や医療の理解を深めるための取り組みも行政と一緒に進めており、必ず“win-win”になるよう、自立のための収益性にも努力しながら、地道に実績を積み上げている。

2. 熊本県八代市（八代市民俗伝統芸能伝承館 お祭りでんでん館）

秩父夜祭と同じ、全国に33あるユネスコ無形文化遺産「山・鉦・屋台行事」の一つ、「八代妙見祭」。その祭りの様子と合わせ、地域の民俗芸能の特徴や後継者問題等の話を伺い、令和3年に完成した「お祭りでんでん館」を視察した。水害や地震による文化財保護のため、八代妙見祭の9つの笠鉦全てが、「お祭りでんでん館」に収められている。またクルーズ船によるインバウンド対応として、多言語対応も徹底されていた。

3. 熊本県熊本市（熊本学園大学）

2016年4月に起きた熊本地震の際に、社会福祉学部の教授が中心となり、「インクルーシブな避難所運営」を実践。750人もの人々を受け入れ、内60名が障がい者とその家族で、1か月半の間、24時間の支援体制を構築。指定避難所ではなかったが、丁寧に被災者に寄り添い、細やかな支援がなされたと、高く評価された避難所となった。さまざまな視点から“避難”を捉え、その経験と教訓を将来への課題として提起されている。

【 文教福祉委員会行政視察報告 本 橋 貢 】

今回の視察は、熊本市「社会福祉連携推進法人ジョイント&リップル」へ伺い、勉強させていただいた。近年の少子高齢化社会において、高齢者介護、障がい児・者の支援、育成など、社会福祉の課題は、複雑化、複合化、多様化している。時代の変化に対応するために、一事業所単独ではなく、社会福祉法人が連携強化をする先進事例を学び、秩父地域における福祉事業に役立てていきたいと感じた。ジョイント&リップルの社会福祉連携推進業務の内容は、1. 地域福祉の推進に係る取組を社員が共同して行うための支援、2. 災害が発生した場合における社員が提供する福祉サービスの利用者の安全を社員が共同して確保するための支援、3. 社員が経営する社会福祉事業の経営方法に関する知識の共有を図るための支援、4. 社員が経営する社会福祉事業の従事者の確保のための支援及びその資質の向上を図るための研修、5. 社員が経営する社会福祉事業に必要な設備又は物資の供給、6. 各種イベント、講演、セミナーの企画、開催、運営管理である。実際には、大規模災害訓練、オープンケアキッズ等の市民参加イベント、高齢者とB型事業所の共同モデル、障がい者アートプロジェクト、合同研修等を実施しており、連携のメリットが生かされていた。

2日目は、八代市民俗伝統芸能伝承館「お祭りでんでん館」を視察。文化財である9基の笠鉦が、災害等からの保護のため、でんでん館に保管されている。クルーズ船の寄港により、千人単位でのインバウンド客が来館する対応も可能とのことであった。3日目は、熊本学園大学社会福祉学部 黒木邦弘教授による「2016年熊本地震におけるインクルーシブな避難所運営の実践」の講義と現場を視察。有意義で実践的な視察となった。

【 文教福祉委員会行政視察報告 坂 本 勝 幸 】

文教福祉委員会行政視察を10月21日から3日間の行程にて行った。

1日目は、社会福祉連携推進法人ジョイント&リップルを視察し、社会福祉連携推進法人についての研修を受けた。ジョイント&リップルは、6つの法人で構成され、高齢者の介護、障がい者の支援、障がい児の育成支援などそれぞれの分野に特化し、それぞれが福祉の事業を行っているが、重層化する福祉的課題に対し、時代の変革と共に、社会福祉法人も変わり続けていく必要があるとの事である。また、6つの法人は合併ではなく、それぞれの法人で業務を助け合う、「win-win」となるよう、各法人で補い合って取り組んでいる。社会福祉連携推進業務としては、地域福祉の推進に係わる取り組みを社員が共同して行うための支援、災害が発生した場合における社員が提供する福祉サービス利用者の安全を社員が共同して確保するための支援、社員が経営する社会福祉事業の経営方法に関する知識の共有を図るための支援と研修、その他である。災害支援業務では、福祉避難所の立ち上げシミュレーションゲーム S g S E（スグセ）を利用して、福祉避難所の立ち上げの実践訓練を行っている。また、各地に赴き研修を行っているそうである。

2日目は八代市民俗伝統芸能伝承館「お祭りでんでん館」にて、ユネスコ無形文化遺産である「八代妙見祭の神幸行事」について研修を受けた。3日目は、熊本学園大学社会福祉学部の黒木邦弘教授による「2016年熊本地震におけるインクルーシブな避難所運営の実践」と題し講義を受けた。熊本地震では、熊本学園大学内に最大受入れ時約750人（障がい者約60人）の避難者を受け入れ、対応を行ったとの講義を受けて、3日間の行政視察を終了した。

【 文教福祉委員会行政視察報告 笠 原 宏 平 】

文教福祉委員会の今年度の行政視察は、熊本県内の施設3か所を視察した。

1か所目は熊本市内の「社会福祉連携推進法人ジョイント&リップル」を視察。社会福祉連携推進法人の中心である社会福祉法人リデルライトホームは、明治24年頃ハンセン病の病院として稼働、昭和になり、時代の変化に伴い、養老院、老人ホームと形を変えデイサービス事業を展開、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、老人短期入所事業を開設するなど事業を拡大し、居宅介護支援事業所や訪問介護ステーションなど、高齢者、障がい者への福祉サービスに努め、地域との接点を増やしてきた。社会福祉連携推進法人としては、参加している6法人で、お互いの連携強化をはかり、事業を継続していくための人材育成と確保、魅力発信、資質向上の取り組みなど、先進的な事業を行っている。

2か所目は、八代市民俗伝統芸能伝承館「お祭りでんでん館」を視察。平成28年にユネスコ無形文化遺産に登録された「八代妙見祭の神幸行事」を紹介する施設で、近年、インバウンドのお客が多く訪れるようになったとの話だった。

3か所目は、熊本市内の熊本学園大学で、2016年に起きた熊本地震に際に熊本学園大学が運営した避難所において、高齢者や障がい者を含む災害弱者へのフォローを45日間にわたり継続した取り組みを、熊本学園大学社会福祉学部の黒木邦弘教授から直接講義を1時間半行って頂き、その後校舎の当時の使用した施設を見学した。避難所の施設として指定されていなかったにもかかわらず、災害時の対応が出来たのは職員・学生の行動・気づきだと思った。以上が今回文教福祉委員会の視察であった。

【 インクルーシブな避難所運営 赤 岩 秀 文 】

熊本学園大学は、2016年熊本地震の際、指定避難所ではなかったが独自に避難所を開設し、障がいの有無にかかわらず、すべての人々を受け入れ高齢者、障がい者を含む災害弱者のケアを行なった。熊本地震の発災直後の初動からの対応が迅速で、指定避難所ではないにも関わらず周辺から集まってきた住民を、まずは学内の安全な建物に保護した。このような状況下では通常保護は不可能と考えるが、大学に理事長、学長が駆け付けたことで判断ができたと考える。大学トップの危機管理意識の高さに敬意を表する。「どなたでもどうぞ」の原則から、障がいのある方とその家族を受け入れた。（施設からの要請もあり）発災から数日後、専門職の滞在支援もあり避難所閉鎖までケアが可能となった。自治体からの要請による避難所ではなかったが、市職員との連絡調整が可能となったため、支援物資の枯渇はなかった。また、災害時における自治体からの調査について、不必要と思われるものについては時間効率を考え、回答をしないこともあった。このように避難所の運営は実情に即した柔軟な対応が必要と痛感した。話は変わるが、学内に建て替えた施設には各階をつなぐ大型のスロープがありベッドの移動も可能、当市に建設予定の市立病院にも設置を検討してもらいたい。

